

「あさひばの歴史と地名アラカルト」 —知る喜びで人生をより豊かに・ あさひばの魅力再発見—

1. 「あさひば」の生活の跡	-----	1 ページ
1) 歴史遺産		
(1) 歴史遺産は、どれ位あるの	-----	1 ページ
(2) 歴史遺産の特色は	-----	2 ページ
(3) 誇れるもの・魅力あるものはなに	-----	3 ページ
(4) 大事に守っていききたいもの	-----	3 ページ
2) 地名	-----	4 ページ
(1) 「村・町名」の移り変わり	-----	4 ページ
○ 「秋津」とは日本の古名		
(2) 「村・町名」にどんな由来・歴史が	-----	5 ページ
① 秋津新町は昭和町より古いのになぜ新町か		
② 氾濫原から台地への移住		
(3) 字名と呼び名（微小地名）	-----	6 ページ
① あさひばの字名はどんな		
② あさひばの微小地名はどんな		
2. 「あさひば」の地名アラカルト	-----	9 ページ
(1) 木山川がいつ秋津川に		
(2) 計路川と計路（けろ）		
(3) 数百年間の水路事業跡		
(4) まぼろしの地名「阿蘇見通り」		

文責：〔中村安幸〕
期日：平成20年12月21日
場所：秋津公民館ホール
主催：秋津公民館講座自治会

※赤文字・枠は令和3年2月年度追記

★「あさひば」は、秋津公民館管轄地域の愛称
(2001年・平成13年～)
㊦秋津、㊧桜木、㊨桜木東、㊩若葉

※歴史遺産の場所、字名やその範囲など
については、秋津公民館ホームページで
地図を紹介しています。

「あさひばの歴史と地名アラカルト」

—知る喜びで人生をより豊かに・ あさひばの魅力再発見—

1. 「あさひば」の生活の跡

あさひばのその時代々を担った人々の生活を伝えているのは、文化と智慧の結集たる歴史遺産と生きた化石ともいわれる地名である。

1) 歴史遺産

(1) 歴史遺産は、どれ位あるの

あさひば地区に人々がいつごろから住み始めたか定かではないが、この地区での人々の生活は古く、すでに縄文中期・貝塚の時代に開始されている。

お堂の一つ、お地藏さんの一つにもそれぞれ歴史があり、人々の生活の営みぶりとムラ・町の発展の姿が窺える。

区分 校区	遺跡	寺社	堂宇	石造物				史跡				合計
				地蔵	水神	他	小計	市指定	水路跡等	他	小計	
秋津	2	4	7	12	5	5	22	2	10	14	25	60
桜木	1	1								2	2	4
桜木東										2	2	4
若葉		1		3	2		5					6
計	3	6	7	15	7	5	27	2	10	17	29	72

注1：遺跡〔埋蔵文化財〕 沼山津貝塚・沼山津遺跡（縄文）・下津代理遺跡（弥生）
 2：寺社（寺） 2 光輪寺（上の寺）・浄福寺（下の寺）
 （神社） 4 沼山津神社・中無田熊野座神社・西無田雨宮神社・竹内神社
 3：堂宇 観音堂・薬師堂等
 4：石造物一他 上津代里の農作業神・中津代里の板碑・新村の弘法さん等
 5：史跡一市指定 四時軒（市指定有形文化財）・四時軒跡（市指定史跡）
 6：史跡一水路跡等 水路跡・堰跡・舟場跡・突井戸跡等
 7：史跡一他 〔史跡一般〕手永会所跡・花立往還・追分石・頌徳碑・
 明治以降の「小学校跡・村役場跡・支所跡・
 村元標跡・工場跡」なども含む。

(2) 歴史遺産の特色は

- ① 校區別には、当然母なる校区である秋津校区に8割強集中し、次に若葉校区である。これは藩政時代から、秋津校区は三村（沼山津・中無田・下無田）の、若葉校区は一村（西無田）の居住区があったからである。居住区外であった桜木校区は4ヶ所、桜木東校区は2ヶ所の分布となっている。
- ② 遺跡を除く、寺社・堂宇・石造物・史跡などは全て戦国時代以降で新しい。貝塚遺跡があるのに、歴史時代・中世前期のものは見当たらない。
また、旧村社の神社三社がともに浮島系で、観請が甲斐氏が台頭した戦国時代中期から末期である。
貝塚の時代から木山川（現・秋津川）の流れに沿い、後ろに託麻の平原を負うて生活をしていただろうに、何故中世前期のものは見当たらないのだろうか。
※河川名変更等については、9ページ
- ③ 沼山津には、寛永10年から寛政10年（1633～1798）まで、又天保14年から明治3年（1843～1870）の廃止まで前後192年間、35村の地方行政の中心地であった。（237年間）の内45年間は木山）
即ち、中津代里（沼山津3丁目10番）に惣庄屋以下手永内の民政を司る役所「沼山津手永会所」があった。しかも惣庄屋は、初代から9代・さらに17・20代と22人のうち11人は光永氏が務めている。光永氏は地名をとって「沼山津四兵衛」と称した。手永内の西端に位置する沼山津が、会所の所在地に選ばれたのは、沼山津が水運の便が良く、肥後藩の御蔵があった川尻とは加勢川でつながっており、会所のすぐ南には船場があり、沼山津手永会所は、地形的にもよき条件を備えていたからと言えよう。
- ④ 沼山津の450m程の間に二寺（光輪寺・浄福寺）があるのも珍しい。
また「東小路・中小路・西小路」の呼称地名も残る。
- ⑤ 慶長8年（1603）江津塘築堤以来の水との戦いが、七ヶ所も祀られている水神信仰に現れている。またその苦闘の跡として水路・堰跡や水路を掘った人を讃える記念碑・耕地整理・圃場整備記念碑等も多く見られる。
- ⑥ 石造物ではお地蔵さんが多い。特に沼山津の二寺の間450m程の間に集中している。それぞれの組内で祀っているが、祀られたのは江戸中期から末期。冷害・水害・虫害など相次ぐ災害・大凶作で飢饉に苦しんだ時代。
〔正徳元年（1711）から慶応3年（1867）までの156年間に134回の大凶作を数え、肥後藩の農村は疲弊し切っていた。〕子どもを守る・大事にしてきたとも云われているが、苦しみからの救済を願い、すがる思いで苦しい生活の中から祀ったと思われる。また地蔵に大地を固めてとの願いがあったのでは。

⑦ 猿田彦は、当地区内では珍しく西無田雨宮神社境内の一ヶ所のみ。

(3) 誇れるもの・魅力あるものはなに

① 格別

四時軒(市指定有形文化財)・四時軒跡(市指定史跡)・小楠公園

② 浮島系三社に見られる珍しい祭祀

9月の祭、子ども相撲奉納時「藁を約40°角に網み、それを割り竹で抑えた吉田司家座(通称追風)」と呼ばれる 変わったしめ縄が二本の神木に祀られる。

③ 限られた所にしかないもの

A 貝塚 (熊本市域に5ヶ所のみ・「きやあばる」の微小地名も残る)

B 沼山津手永会所跡(上益城郡で6ヶ所・託麻郡は2ヶ所、
会所跡・裏門・門前・仕事場などの呼称地名も残る)

C 川尻御蔵との繋がりが深い沼山津・間島の舟場跡と町並み

D 青紫色のかれんな花を咲かせる「絶滅危惧種に指定されている水生植物
ミズアオイ」とその生息環境が保たれている秋津川(20.10.9 熊日)

④ 熊本市域で数少ないもの

A 桜木4丁目の追分石(右すなとり・左ぬやま津)

B 戦国期の板碑が1ヶ所に(中津代里墓地)4基集中していたのは珍しいと
される。(現在は無い)

(4) 地域の方で大事に守っていききたいもの

A 桜木4丁目の追分石 (追分石はかつて2つにわけて倒れていたが復旧された。)

B 花立往還(木山往還)と木山町道(坂本龍馬も通ったかも?)

C 沼山津神社境内の手水鉢

「丸に違い鷹の羽の紋」や「享保18年(1733)9月」の紀年銘「沼山津四
兵衛(惣庄屋6代惟明)・光永兵九郎・同武助・同幸助」の銘がある。

細川藩の餓死者6125人にも及んだ享保の大飢饉の翌年の事。

D 昭和町の桜並木

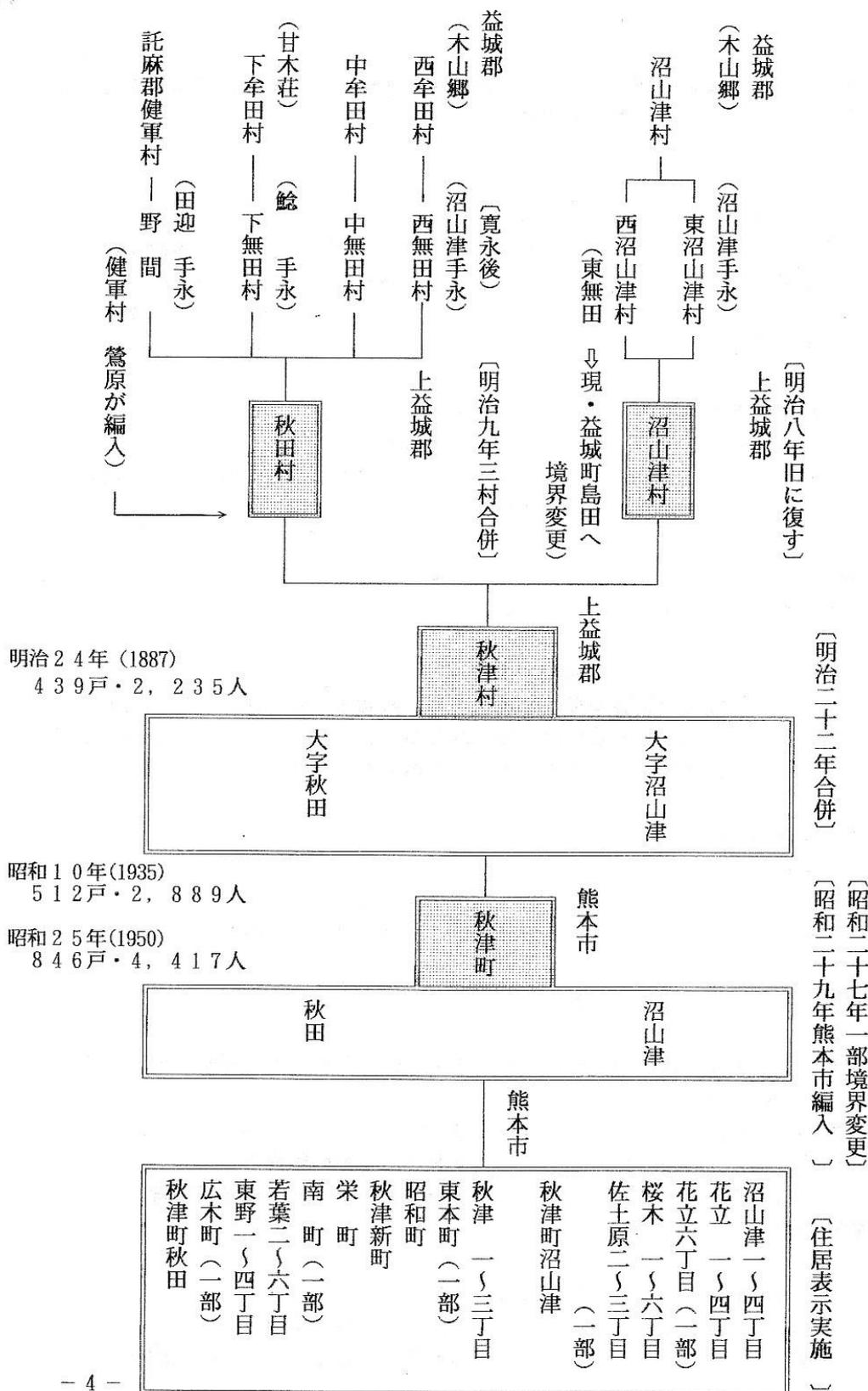
植樹から56年、既に老木化している。

E 中無田神社境内にある「大正元年(1912)の大洪水記念樹の銀杏」と
昭和47年に建立された「大正元年大洪水記念銀杏植樹の記念碑」

2) 地名

2) 地名

(1) 「村・町名」の移り変わり



- ① 地勢 託麻台地南端のすそ部と秋津川・木山川・矢形川の氾濫原からなる。
- ② 沼山津 湿地の林と舟着場を指す。
牟田・無田 湿地やヌカルミの田。
- ③ 秋津 「秋津」とは日本の古名
「秋津村」の村名は秋田の「秋」と沼山津の「津」をとり、日本の国の古い呼び名「あきつしま（ね）」になぞらえて命名されたという。
「あきつ・あきつしま（ね）」には、トンボの故事と地名説があるが、いずれも「実り豊かな所」を云う。
- ④ 三菱跡地が8ヶの町へ（昭和31年11月1日～）
健軍5900番地 ⇒（東町）・東本町
〃 6000番地 ⇒ 若葉町・栄町・南町・（新生町）・（水源町）
〃 900番地 ⇒（湖東町）
- ⑤ 昭和町誕生（昭和34年12月1日～）
秋津町大字秋田字北境塚1595番地 ⇒ 昭和町へ
- ⑥ 東野 誕生（昭和41年～）
昭和37年開校の東野中学校の校名より、熊本市の東の広い野を意味する。
万葉の歌人・柿本の人麻呂の「東（ひむがし）の野にかぎろいの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ」の「東の野」から採り命名。
※町名から学校名が命名されたのではなく、学校名から町名を命名
- ⑦ 現在の住居表示
昭和48年 8月 1日実施 第9次後期
平成 1年11月27日実施 第23次後期
平成 3年 2月25日実施 第24次後期で現在の町名に

(2) 「村・町名」にどんな由来・歴史が

地名には、その土地の地形がわかり、その土地を開拓した足跡がたどれ、生活にまつわる伝承がある。

また水を利用した半面、水害との戦いが数百年にわたり続けられてきた。

現在の美田は先人たちの営々として水利事業への苦闘の賜物である。

いずれにしろ村・町名には、江津塘築堤と三菱の工場と関連施設の建物が一大転機をもたらしている。

- ① 秋津新町は昭和町より古いのに何故「新町」か
- | | | | | |
|---|----------------|---|-------------------|---|
| [| 沼山津村・中無田村 西無田村 | ⇒ | 木山郷—沼山津手永 |] |
| | 下無田村 | ⇒ | 甘木郷—鯉手永(六嘉村の内だった) | |

もともと下江津湖の東、矢形川の氾濫原に位置(現・矢形橋の南一帯)していたが、江津塘築堤以後は水害常習地帯となり、惨禍に耐え難く、集落こぞって320数年前の天和年間(1681~83)頃に安住の地を求めて秋津川右岸の台地に移住した。つまり土地の低い湿地地帯から少し高い地へ上がる「移転」したので、移住先の下無田村を「上がり(あがり)無田または新村」と呼んでいた。

明治8年(1875)に境界変更。

その「新村」が「秋津新町」となり、当時の苦労を今に伝えている。

東野1丁目にある新村の天神さん(天神・観音二体)・新村地蔵や水玉公園の新村の弘法さんは移住した集落・人々の守り神・仏として祀られたのであろう。

旧屋敷跡は、秋田の42番字名「古屋敷」として、地名で昔の名残りをとどめている。

② 氾濫原から台地への移住

江津塘築堤以後に「新村」と同じく「中無田・東無田」の集落も相前後して今の地に転居している。

中無田が慶長(1596~1614)の頃まで居住した地は、秋田の36番字名「三官屋敷前」の地名を残して、昔の名残りを田んぼの中にとどめている。

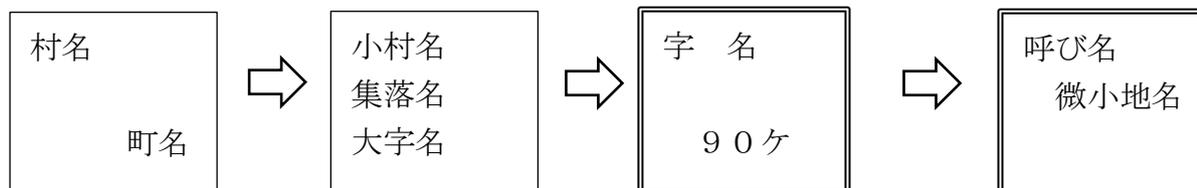
沼山津の内であった東無田は、木山川南東部の小池台地の北縁に移ったといい、集落形成と同時に神社の勧請した。現在の東無田八幡宮の勧請は慶長18年(1613)と云われている。

明治8年(1875)に現在の益城町島田に境界変更され、跡は沼山津の25番字名「東無田」として残り、「屋敷田」と呼ばれている。

(3) 字名と呼び名(微小地区)

地名にも色々な区別がある。

特に「字名と呼び名(微小地名)」が生活に密着していた。これらの地名には、「自然地形・災害・開拓・軍事・宗教・民族・交通・歴史」などの地名があると云われ、先人の智慧が刻まれている。



あさひばのには、90ケ(沼山津地区44ケ・秋田地区46ケ)の由緒ある字名があった。

(公民館ホームページで紹介の「字(あざ)マップ」関連資料参照)

①あさひばの字名はどんな

(熊本地名研究会員 松野國策氏の分類による)

	地形(自然)地名	開拓地名	社会地名	宗教地名
沼山津	鶯原・貝原・萩原 西原・桜木・杉本 計路・水溜・日焼 花立・北花立 西無田・東無田 小無田・竹の内 佐土原・古閑前 筒井田・筒井久保 須崎原・古閑久保 上古閑久保	上津代里・中津代里 下津代里 堀切・樋口・長田 横島・境峠・上内 下内・橋本・橋口 堀の口・戸井出 保手本	天神木	寺田・名守 奥分 兵糧田 凶志分 大城町
44ケ	(22ケ)	(15ケ)	(1ケ)	(6ケ)
秋田	鶯原・北原・東原 中原・西原・杉下 中須・鳥飼・鶯場 計路・間島・筏場 水溜・南水溜 穴無田・佐分浦 野間原	上の丁・下ノ丁 堀割・出口・土手下 棚田・境塚・北境塚 碓下・塘下・前塘元 六反・西六反 一番割・二番割 間島前・中道下 上道下・月の輪 上道上・上横道上 井寺鶴・井寺道下 一の口・南一の口	宅地 居屋敷 古屋敷 三官屋敷前	
46ケ	(17ケ)	(25ケ)	(4ケ)	

- 宅地・古屋敷 ----- 下無田(新村)の住居地の新旧
居屋敷 ----- 西無田の住居地
上の丁・下の丁・三官屋敷前 ----- 中無田の住居地の新旧
上津代里・中津代里・下津代里 ----- 沼山津の住居地
- 現・住居表示の「桜木・花立・佐土原」は、字名から採用
- 三官屋敷前 ----- 三官とか四位官というのは、日本に居住していた中国人の官職を表したものと云われている。「三官の塚・三官橋」などの地名も残っていたと云われ、何百年か前に当地方に居住していた名残と考えられている。
- 水玉公園 ----- 秋田の「水溜」の好字化

② あさひばの呼び名はどんな

坂や堀の一つ一つにも畑一枚にいたるまで呼び名がつけられ、地元の人々に古くから伝わり親しまれている。しかし、これら呼び名も環境の変化に伴い、いつか忘れさられたり消滅してしまうものも少なくない。あさひばに残っている呼び名には、次の様なものがあり、人々の営みを如実に表し、庶民の暮らしの記憶を伝えている。※圃場整備事業後も水田の場所表示に字名が使用されている。

(平成5年度の郷土史講座生 水上則弘・小田秀邦・矢田剛氏の調査採録による)

上沼山津地区	会所跡・裏門・門前・仕事場・舟場・内村・外村・出屋敷 中竹・川端・新道・標ノ木（しめのき）・東小路（しゅうじ） 堂の前（どおんまい）・上ノ寺・馬神さん・五百間・やげん堀
下沼山津地区	貝原（きゃあばる）・野林山（のばしのやま）・小無田 中小路・西小路・洲崎・下の寺・たんたん落し・屋敷田
桜木地区	追分・五郎堀・東脇・宮の前・花立往還・堂面
中無田地区	えず原（えずばる）・やんぼし塚・くぼ・うっぽげ・中通 西のちょうもん・上の小路・下の小路・中道・横道・出小屋 野間の原（のまんはる）・出口・水溜・さわら・掘割・新道端 上の川入場（かみのかわいれば）・下の川入場・一丁八反
西無田地区	神屋敷・新屋敷・水神さん・託麻塘・御見塚（鬼塚）・二方塚 かわて・すいじんぼり・江津湖んはた・うらいでんはた

- 内村・外村・出屋敷・新屋敷・出小屋 -----ムラの発展経緯を示す。
- 託麻塘 -----現在の江津塘、上益城郡と託麻郡との境界の塘ということから、当時の人々は託麻塘と呼んだ。
- 御見塚（鬼塚）-----西無田の西方に小高い塚がある。託麻塘堤防工事の際この塚より清正公が眺望されたと伝える。
清正公に対する思いが現されているのでは。
- 神屋敷（宮屋敷）----西無田の東北隅、西無田雨宮神社が創建された所。
現在地に遷座されたのは安永7年（1778）
- 花立往還 -----木山往還の花立懸かりを「花立往還」、熊本町向けを「熊本往還」と呼んだのは、地元の人々の愛着の表れでは。

2 「あさひば」の地名あらかると

1) 木山川がいつ秋津川に

秋津という地名は明治22年からだ。

[現在] [旧]

秋津川 ⇐ 木山川

木山川 ⇐ 赤井川 ⇐ 計路 (けろ・きよろ) 川

矢形川 ⇐ 矢形川

- 昭和8年から同11年計迄の三川の大改修後に改名。(それまでは川に堤防はなかったと伝える。川が改名したのは昭和20年代初めか?)

※昭和8年(1933年)赤井川の河川改修工事着工。同16年に完成し、河川名が改称された。

2) 計路(けろ・きよろ)川と計路(沼山津の44番字名・秋田の38番字名)

数百年来荒れていたところを198~199年前の文化6・7年(1809・1810)

に田開きがなされ、それを感謝して173年前の天保6年(1835)に中無田石塔水神が建立されている。その碑文に

「そもそも きよろと申し来たり 平常の水内は4・5尺に及び 数百年杭を定め荒れに相成り居り候処 文化6・7年に開き明け 新田 出来(しゅったい) 仕り候」とある。(記録にある圃場整理事業のはしり)

- 計路川……きよろ きよろと川筋が雨の度に変わる、流路移動を行うところからきている。
- 字計路……計路川の流域で、数百年来荒れに荒れていた所を開田した所を字計路と名付けられた。

水神は元々裏井出上流端の字計路の中程にあったが、昭和55年圃場整備事業で現在地(鉄塔脇)に移転された。旧地には水神木があり、一面湖水と化してもこの木が目印となっていたと伝える。

3) 数百年間の水利事業の跡

かつての秋津の田圃には各所に用排水路があり、無数の溝(クリーク)があったのは苦難から逃れようと数百年の間、水利事業に努力を続けたからである。

中でも大事業は「万蔵井出」の掘鑿(掘削)であった。※クリークの様子は、国土交通省 国土地理院 「地図・空中写真閲覧サービス」で昭和50年頃を指定して検索「空中写真」で見ることができます。

- 万蔵堀(万蔵井出)
木山川と秋津川の間であって、沼山津橋より南へ凡そ1000mの地点を上流広安(現益城町)から西へ、中無田境に達している。
文化年間(1804~17)、荒木万蔵(当時は上益城郡会所の役人)の手によって掘削されたもので万蔵井出と呼ばれている。
- 新左衛門(しんじゃ)堀跡

万蔵井出の北側に平行して、間島横道の所に達している「しんじゃ堀」がある。寛政2年頃（1790）、中無田の庄屋 八重桜新佐衛門の事業によるものでその名があり、堀は長さ422間、幅5間、深さ5尺（長さ760m・幅9m・深さ1.5m）その恩恵を蒙る田地20町歩。

墓は記念碑の傍に移転されて、中無田の間島橋近くの県道沿いに今も祀られている。墓碑には「頭取 八重桜新佐衛門 寛政十戊午（つちのえうま）（1798）八月十日没」とある。

翁の遺徳を偲び「新佐衛門堀之碑」が、中無田区民一同で昭和33年に建立されている。

○ 裏井出跡

万蔵井出・新佐衛門堀の井出を裏井出に導いて下流西無田懸り方に流したのは、嘉永年間（1848～53）に時の惣庄屋河瀬安兵衛の嗣子典次の力によるものである。

○ 秋田堰跡・計路堰跡・沼山津堰跡・鶯川の堰跡・しんじゃ堀の堰跡

長い歳月に渡ってこれらの堰の水が、秋津の水田を潤していた。

これらの事業によって水利は以前に比して良くはなったものの、年々の洪水に全面の田が湖水と化すことは変わらなかった。そして作物の被害を蒙ること堤防の決壊、橋梁の流失、さては人家の浸水等実に言語に絶するものであった。

183年前の文政8年（1825）、加勢川堀通しの大工事着手。

「百年来お願いしてきたこと。工事の完成後には米一俵ずつ増やして年貢を納める。年々一万八千俵の年貢を必ず納入する」とまで云わせる程、嘆願し続けてきた工事。

百年来の願いが叶って鯰・沼山津手永の村民の喜びは例えようもなく、天にも登る心持ちで、「老婦女子に至るまで喜び限りなし」と表現する程であった。

しかし、5ヵ年の歳月と人員延べ3百万人を出動させる大工事であったが、その後も幾たびの河川改修、排水動力ポンプの設置、土地基盤整備事業（昭和55年着工、15年間の歳月を経て平成6年度に終結）等が進められ、耕地は一変して現在の豊穡な水田地帯となっている。

4) 幻の地名「阿蘇見通り」とは

三菱重工業（株）熊本航空機製作所の工場群のレイアウトの計画図は、将来を見込んだ理想的なものであった。かつ将来何らかの形で残り、熊本市の発展に寄与できるものにしておきたいとの考えがあった。

工場敷地を真東と真南の長方形（約970m×約1520m）にとった。よく見ると阿蘇に向かって12度ほどふれていることが分かったので、工場建屋も12度ほどそれぞれふれた配置にレイアウトした。

これは工場の真ん中を南北に貫く大通りのどこからも阿蘇連峰がよく見えるよう

にするためであった。この大通りを「阿蘇見通り」と名付けようと、計画にあたった技士達は夢をふくらませていたという。戦時中の工場建設にも若い技術者のロマンが秘められていた。

【終わりに】

ふるさと秋津地区（あさひば）は、戦時の三菱熊本の建設が一大転機となり、健軍と共に戦後半世紀の間に人口7倍強と大きく変貌し、発展してきた。しかしそれは永年にわたる先人の血のにじむような水害との戦いの上に成り立っていることを忘れてはならない。その秋津地区は、現在世帯数13,168戸、人口32,638人（平成20年10月1日現在）の人々が住む町となっている。

ふるさと秋津地区（あさひば）に誇りと愛着を。

※三菱重工業㈱熊本航空機製作所関連の資料・地図なども、秋津公民館ホームページに掲載しています（Google マップやGoogle アースを活用した地図も掲載）。

秋津公民館ホームページ →

